

御伽草子『御曹子島渡』と江の島弁才天

はじめに

中世末から近世初期に制作された御伽草子と称される作品は、約四百種類に及ぶ。本稿ではその中でも、『御曹子島渡』という作品を取り上げたい。義経を主人公とする、いわゆる判官物であるため、『義経記』などの周辺作品から影響を受けている作品である。またこの作品は、享保期に洪川清右衛門によって刊行された「御伽文庫」二十三編に入っている作品であり、御伽草子の中でも重要な作品と言いうことができよう。

主人公源義経に藤原秀衡が、蝦夷が島（千島）の喜見城の都にある大日の法という兵法を取得するように勧める。そこで義経はとさの湊から航海に出るのであるが、途中様々な島を巡った後、喜見城の都に到着する。そこはかねひら大王の治める鬼の島であった。義

経の吹く笛に感心した鬼達は、義経をかねひら大王の許へ連れて行く。義経は酒宴で、大王の娘である朝日天女に笛を吹いて思いを伝え、天女と契りを結ぶ。そして天女の助けを借りて、兵法を手に入れる。その後天女と別れ、追いかけて来た鬼達を振り切り、日本へ帰還するという話である。

物語の前半が義経の島巡りという異郷遍歴譚、後半が女性の援助による兵法取得譚となっている。義経の兵法取得譚の一種であり、『義経記』巻二「義経鬼一法眼が所へ御出の事」、御伽草子『判官みやこばなし』『みなつる』などの鬼一法眼譚が基になっている。

一、『御曹子島渡』と江の島弁才天

『義経記』や御伽草子『判官みやこばなし』『みなつる』では、義経は兵法を持つ鬼一法眼という人物の娘と契り、娘の援助によって

兵法を取得する。『御曹子島渡』でも鬼の娘である朝日天女の援助によって兵法を取得する。鬼一の娘と朝日天女は同じ役割を担っているのであるが、他の兵法取得譚にはない、『御曹子島渡』の朝日天女のみが持っている特徴がある。その一つにこのような記述がある。

この天女の本地をくはしくたつぬるに、日本さがみの国ゑのしまのべんざいてんのけしん也。よしつねをあはれみ、げんじの御よになさんため、おにのむすめにむまれさせたまひ、兵法つたへんそのため、かやうの方便有とかや。

この部分は義経を日本へ逃した後、父の大王によって朝日天女が殺される場面の直後に位置している。鬼一法眼譚には娘を神仏とする記述はなく、『御曹子島渡』独自の部分と言える。本稿では朝日天女を江の島弁才天とする記述に注目し、江の島弁才天がこの物語に用いられた意図を探ってみたい。

『御曹子島渡』と江の島弁才天との関係について直接触れられている論文は、これまであまり出されていない。島内景二氏は「江の島には竜神をめぐる種々の伝承が存在する」^①ことから、朝日天女は「竜女である」^①とされ、「弁財天Ⅱ蛇Ⅱ竜Ⅱ鬼」という図式が成り立つ（中略）弁財天は水辺に祀られることが多く、起源を遡れば古代インドの水の女神であろうといわれている。（中略）彼女（朝日天

女 引用者注）が海の彼方の千島にいるのも、建蓋（茶碗）の中に水を入れて行なう濡手の法で義経に自らの死を伝えたとされるのも、すべては彼女の本性が「水の女」だからであろう。^①と言われている。また、河北洋子氏は「源氏に関係が深い女神と言え、まず江の島弁財天が挙げられるが、それだけではなく、秀衡調伏の為に勧請されたのがこの神社の始まりだったことも江の島弁財天を本地とした理由だと考えられる。（中略）『御曹子島渡』の中では、江の島弁財天はかねひら大王（秀衡）調伏の功德を明らかにしているのである。」^②と言われている。

島内氏の御論であるが、水の神である弁才天の性質と、朝日天女が水と関わりを持っている点に関連があるというのは、氏の言われている通りである。しかし、弁才天が水の神であり竜神と結びついているのは、江の島弁才天に限ったことではなく、弁才天としての性質である。つまり、『御曹子島渡』に弁才天が登場する理由は説明できるが、江の島である必然性はこれだけでは説明できない。

次に河北氏の御論を見てみたい。秀衡調伏を目的に江の島弁才天が勧請されたという記事は、『吾妻鏡』寿永元年四月五日の条に見える。

しかしこの記事を直接この物語に結び付けてしまうのは無理がある。『御曹子島渡』の中にも秀衡は登場するが、物語中での秀衡は、

義経に大日の法の存在を教えるという航海の動機付けの役割を担う。また、義経が兵法を手に入れ奥州に戻ってきた時、秀衡の様子は「源氏百代の代とならんことうたがひなしとて、よろこぶ事かぎりなし。」とある。ここから義経の保護者であり、源氏の代となることを心から望んでいる様子が読み取れる。よって、鬼のかねひら大王と秀衡とを同一視し、江の島弁才天が秀衡調伏を象徴しているとは考えにくい。そしてまた、江の島弁才天は源氏に関係が深いと言われているが、その根拠はこの『吾妻鏡』の記事しか挙げておられない。

本稿では江の島弁才天の信仰の歴史、そして同時代の文学作品に描かれる江の島を考察した上で、『御曹子鳥渡』との関係を論じた。

二、江の島弁才天について

まず江の島弁才天の信仰の歴史について見ていきたい。是沢恭三氏『江島弁財天信仰史』^③、そしてそれを参考に編纂された『藤沢市史』^④が江の島研究の基本となっており、江の島弁才天の歴史が詳しく考察されている。鎌倉期から江戸期における江の島弁才天に関する史料の中で、『御曹子鳥渡』と江の島弁才天との関わりを考える上で重要なものを挙げさせて頂いた。

江島神社は神奈川県藤沢市に位置し、現在の江島神社には奥津宮・中津宮・辺津宮・御窟があり、その総称として江島神社と呼ばれている。明治以前は本宮旅所、上之宮、下之宮の三宮で、この三宮と本宮である御窟に弁才天が祀られていた。そして本宮には岩本院、上之宮には上之坊、下之宮には下之坊という別当寺が存在していた。

江の島弁才天が歴史上初めて現れるのは、河北氏の御論で触れられていた『吾妻鏡』寿永元年の記事とされる。寿永元年四月五日、源頼朝は文覚に秀衡調伏のために、弁才天を江の島に勧請させ、頼朝自ら鳥居を奉納している。

五日乙巳。武衛令^レ出^二腰越^一辺江島^給。(中略)是高雄文学上人。為^レ折^二武衛御願^一。奉^レ勸^二請大弁才天^一於此島。始^レ行^二供養法^一之間。故以令^二監臨^一給。密議。此事為^レ調^二伏鎮守府將軍藤原秀衡^一也云々。今日即被^レ立^二鳥居^一。其後令^レ還^二給^一。

以降、將軍頼朝の参詣(建仁元年六月一日)や將軍実朝の御台所の参詣(建保四年三月十六日)、將軍頼經の参詣(安貞二年四月二十二日)が『吾妻鏡』に見られる。^⑤また、祈雨の法や七瀬の祓が、將軍家の命によって度々江の島の龍穴で行なわれている。^⑦そして『吾妻鏡』には庶民が参詣した記録も残っている。^⑧

また、『太平記』巻五「時政参籠榎島事」には、北条時政が江の

島に参籠し、子孫繁昌を祈り、鱗を江の島弁才天から授かったという有名な三つ鱗の話がある。ここからは沢氏は鎌倉時代には、將軍家と北条氏の信仰を江の島弁才天は集めていたと述べておられる。^⑨

鎌倉幕府滅亡後、室町時代には足利成氏に始まる古河公方が信仰していたとされる。^⑩それを示す史料として「岩本院文書」がある。

「岩本院文書」というのは、当時江の島弁才天の総別当の地位にあった岩本院所蔵の文書のこと、その中に成氏の感状が残っている。^⑪その後、古河公方四代目晴氏まで江の島との関係は続いたと言われている。^⑫

そしてまた、「岩本院文書」には後北条氏関係の史料が多い。その中で北条氏忠の書状、氏康の書状を例に挙げる。^⑬

一九六一 北条氏忠書状

〔包紙、ウハ書〕
「岩本坊 氏忠」

江島石屋宮御還宮之由、誠珍重之至候、仍太刀一腰并馬一疋進納申候、於 天前、弥武運長久御祈念頼入外無他事候、恐々敬白、

十月六日 氏忠(花押)

江島

岩本坊

一九四六 北条氏康書状

御伽草子「御曹子島渡」と江の島弁才天

就出陣、天前江神馬奉進納候、本意之上者、必参詣可申候、能々可被抽精誠候、恐々謹言、

卯月十七日 氏康(花押)

岩本坊

傍線部を見ると、武運長久の祈願や出陣の際の戦勝祈願のための書状であることが分かる。後北条氏関係の書状には、このような戦勝祈願を示す語が多く見られた。「相州兵乱記」には、

就中弁財天ハ観音ノ御分身。北条家ノ守護神。御紋ハ斯レ大蛇ノ鱗トカヤ。御当家ニハ殊更御崇敬最ナリト委ク演説ス。(中略)亦御城北ノ堀ノ内へ。即法印ヲ以テ江ノ島ノ弁財天ヲ移シ奉リ。当城ノ鎮守ト崇メ奉リ。武運ノ長久ヲ祈ラレケリ。^⑬

とあり、ここから沢氏は、後北条氏が江の島弁才天を信仰していたのも、北条氏の江の島信仰が影響していたことを指摘されている。^⑭

江戸時代になると、幕府が江の島から近い江戸に開かれた。そのため江の島弁才天は將軍家代々の祈禱所となり、將軍の平癒祈願などが行なわれていたとされる。^⑮是沢氏が挙げておられる史料の中で、「岩本院文書」に収められている口上書に、両御丸御年寄中宛のものがある。

相模国江嶋本宮岩屋辨財天之儀者、古より源家代々御尊敬厚く御座候二付、東照宮様御代初、天下御安全之御祈禱被仰付、御

札献上仕、夫より長日御祈禱修行仕、御代々御札献上仕候¹⁴

年度が記されていないものであるが、家康の時代から天下安全の祈禱札を献上していることを述べており、家康から続く將軍家の信仰を江の島側が主張している。

しかしそれ以上に、「古より源家代々御尊敬厚く」と、古くから源氏は代々江の島弁才天を信仰してきたと主張していることは注目すべきことである。徳川氏が源氏を名乗っていたため、口上書の中で源氏の信仰を強調したと思われる。江戸中期頃から庶民の信仰が盛んになる。今は『御曹子鳥渡』について考えているので、明らかに作品成立後である江戸中期以降については省略する。

以上、江の島弁才天の信仰の歴史を見てきたのであるが、その中でも注目すべきは源氏と北条氏の信仰である。源氏による信仰は頼朝以下鎌倉將軍家を初め、足利氏、徳川氏と続いている。鎌倉時代からはるか後である江戸時代に、江の島側が自ら源氏との関わりを主張していることから分かる。しかし、それと同時に北条氏が江の島弁才天を信仰していたこともまた事実である。単に源氏との関わりのみを主張することはできないが、やはり鎌倉政権の担い手であることは注目すべきである。次に『御曹子鳥渡』の成立年代に近い文学作品から、江の島弁才天の姿を探ってみたい。

三、江の島弁才天と軍神信仰——謡曲を中心に

江の島が登場する作品はそれほど多くはないが、最初に謡曲に注目したい。謡曲には『江島』『江島童子』『鱗形』があり、『江島』『江島童子』は『江島縁起』に、『鱗形』は『太平記』巻五「時政参籠榎鳥事」に拠っている。最初に謡曲の典拠となっている、『江島縁起』に描かれる江の島弁才天を見てみたい。

真名本（江島神社蔵本 享祿四（一五三二）年書写の奥書）

于時天女忽然雲上現前。其形端巖微妙八臂具足、左天女右童子侍立。¹⁵

仮名本（江島神社蔵絵巻、岩本院本（室町後期写）を模写）

そもくりうくうがべんさいてんによは、もんとく天わうにんじゆ三ねんじかく大しのさうくよりこのかた、しやうしくわんねんにいたるまで三百七十三ねんのれきなり。¹⁵

これによると、二臂で琵琶を抱えた姿の妙音弁才天ではなく、真名本では八臂弁才天、仮名本になると増補がなされ、宇賀弁才天であるとされる。宇賀弁才天については、山本ひろ子氏の御研究が詳しい。¹⁶ 宇賀弁才天は『金光明最勝王経』の「常以二八臂 自莊嚴 各持弓箭刀矛稍斧 長杵鐵輪并縞索」という八臂弁才天から影響を受けた八臂の姿で、福德を与え、悪神を降伏するという性質を持つ

という。

金井清光氏は縁起を典拠とした謡曲『江島』『江島童子』には、福神信仰が表われていると言われている¹⁸⁾。氏のご指摘通り、謡曲『江島』や『江島童子』では、

衆生済度のその御方便も。まづ福寿円満の願ひを叶へ。現受無

比樂後生浄土曇らぬ宝珠を君に捧げん (『江島』)

我を信ぜん輩は、唵薩羅薩伐帝曳娑婆訶と、朝暮唱ふる衆生に
は、福寿円満快樂と守るべし。(『江島童子』)

のように「福寿円満」という語が見られる。

しかし福神という性質だけではない。謡曲『江島童子』には、「天女龍神と形を顕はし、七難即滅七福即生、悪事災難を悉く払ひ、武運長久所願成就と宣ふ御声もあらたに聞こえ¹⁹⁾」という部分もあり、「武運長久」という語が見られる。また謡曲『鱗形』には、

我世の中に、あらん程。たとひ四敵の、寄せ来るとも。此旗を
指上は、我神通の、身を変じて。解脱の楯となり、六所三明の、
剣を引つ提げ。ふげんせきしつの、関を作つて。無明懺悔の、
敵を払はば。其身も息災、安穩なるべし。²¹⁾

と弁才天が身を変じて敵を払うという、軍神としての性質が表われている。

『金光明勝王経』には「於軍陣處戰恒勝 長養調伏心慈忍²²⁾」

御伽草子『御曹子鳥渡』と江の島弁才天

と、弁才天の軍神としての性質が示されている。また先に触れたように、江の島弁才天勧請の目的は怨敵調伏であるが、調伏に用いられる弁才天は武器を持つ八臂弁才天と言われている。加えて、後北条氏が軍神として信仰していた背景にも、弁才天の軍神としての性質を考えることができる。

江の島弁才天が福神としての性格と同時に、軍神としての性格も持っているということは、『御曹子鳥渡』において兵法伝授の援助をするのが江の島弁才天であるということと関係があるように思われる。江の島弁才天は兵法取得を成就させる女神としてふさわしいと言える。

四、江の島弁才天と源氏奉祝

次に、『御曹子鳥渡』と同ジャンルである御伽草子で、江の島弁才天はどのような存在なのであろうか。江の島弁才天或は江の島が登場する作品を挙げると、『頼朝の最期』『浜出草紙』『唐糸さうし』がある。『浜出草紙』『唐糸さうし』の該当部分を引用する。

三日の日のごつしやうには、江の島まふでにことよせて、御は
まいでとぞきこえける。(『浜出草紙』)

ゆいのはまにたつなみは、いくしま江のしまつゝいたり、ゑの
しまのふくでんは、ふくじゆかいむりやうのほうじゆをいただき

参れたり（『唐糸さうし』²⁴）

『浜出草紙』は、梶原景時を初めとする御家人が頼朝を接待する。その中で三日目に江の島詣でに事寄せて、浜辺で舞楽を催すという場面である。『唐糸さうし』は、唐糸の娘万寿が母を助けるために、頼朝の許に奉公していた。この場面は、万寿が鶴岡八幡宮にて、頼朝の御前で今様を奉納する場面であり、引用部分は今様の歌詞である。

これら江の島の登場する作品は、いずれも頼朝を主題とした作品である。また『浜出草紙』と『唐糸さうし』の江の島が出てくる場面は、共に祝賀的雰囲気が漂っている。『浜出草紙』は作品全体が頼朝や鎌倉政権を祝福した作品である。『唐糸さうし』も頼朝の栄華を祝福する鶴岡八幡宮での奉納の場面であり、これも祝賀の場面と言える。『頼朝の最期』は頼朝ではなく頼家の時代の話となっており、江の島弁才天は頼家達に福を授ける存在とされている。田中貴子氏は『頼朝の最期』と『太平記』「時政参籠榎島事」から、鎌倉幕府と江の島弁才天との結びつきの強さを述べておられる。²⁵

頼朝が中心となる作品は鎌倉が舞台となる。そのため、鎌倉から近い江の島が登場することはよくあることかもしれない。しかしやはり地理的な関係だけではなく、『吾妻鏡』に見られるような鎌倉將軍家の江の島弁才天信仰が背景にあるため、江の島は御伽草子世

界の中で頼朝や鎌倉政権を讀える場面に用いられる場所となったと考えられる。このことは『御曹子鳥渡』について考える時、重要な意味を持つ。

ここで『御曹子鳥渡』に戻ると、江の島弁才天は「げんじの御よになさんため」義経を助けたとされている。そしてこの物語の末尾は次のように結ばれている。

かくて、ひやうほうゆへ日本国をおもひのま、にしたがへてげんじの御代とならせたまひけり

末尾の「げんじの御代とならせたまひけり」と、弁才天が「げんじの御よになさんため」援助したという記述は明らかに呼応しており、物語の最後には義経一人から源氏の御代に視野が広げられるとすることができると言える。このように『御曹子鳥渡』が義経一人を奉祝するのではなく、源氏の御代を奉祝して物語を締めくくるのは、『浜出草紙』や『唐糸さうし』と主題を同じくしていると言えるのではないだろうか。御伽草子の中では頼朝や鎌倉政権を讀えるために江の島が用いられており、江の島弁才天は『御曹子鳥渡』でも鎌倉政権奉祝という役割を担っていると考えられる。

佐伯真一氏は鎌倉政権への寿祝が中世後期の文芸に多いことについて、「源平合戦期の動乱を収めた頼朝という認識が、次第に「頼朝による平和」を武家政権そのものの由来譚として語るものとなり、

ついに「寿祝の対象として、「頼朝」が一つのためでたい記号の如きものに化していった」ことを背景に見ておられる。「御曹子鳥渡」にもこのことが当てはまるのではないか。「御曹子鳥渡」の作者は源氏の御代と江の島弁才天を組み合わせて用いることにより、武士の世の始まりとしての鎌倉政権を奉祝したのではないだろうか。

五、江の島弁才天と『御曹子鳥渡』諸本

これまで江の島弁才天と『御曹子鳥渡』との関係を、洪川版「御伽文庫」（以下御伽文庫本）を用いて考察してきた。この御伽文庫本以外にも、江戸期の写本が少なくないながらも現存している。次に諸本間の異同から、江の島弁才天を捉えたい。

『御曹子鳥渡』の諸本は大きく三系統に分けられる。御伽文庫本や大東急記念文庫蔵本などの流布本系統諸本と、その異本として秋田県立図書館本（以下秋田本）や赤木文庫旧蔵本がある。この江の島弁才天に関する記述は、秋田本にだけ見られない。よって秋田本を御伽文庫本に代表される流布本の比較対象とする。両者で江の島弁才天とされている朝日天女がどのように描かれているかを比較し、それが江の島弁才天の記述の有無とどのように関係しているかを考察したい。それに当り、両者の差が最も顕著である、義経と天女の別れの場面に注目したい。

御伽草子『御曹子鳥渡』と江の島弁才天

天女み給ひ。(中略) 大事のいできぬそのさきに。はやくかへり給へとぞ仰ける。よしつねきこしめし。大事出来御身の命のがれずは。われもともに御身のごとく成べし。さらずはあしはら国へいさ、せ給へ。御とも申さんとありければ天女是をき、給ひ。あしはら国へまいる事。ゆめくならざる事にて有。

なごりおしみの物がたりに。此ひやうほうのいとくをかたりきかすべし。御みを返し申さんに。さだめて討手むかふべし。そのときえんさんといふほうを。をこなひうしろへなげさせ給ふべし。(中略) 大事いできぬそのさきにとくかへり給へとて。天女はうちに入給ふ。(御伽文庫本)

(義経の言葉) 御みも此たひ、かたらいて、かへりたく、おもへとも、御みのことくなる、すかたかたちの、あつばれなるは、りうじん見いたまふなり、もしさもあれば、われも御みも、にほんにかへるへきこと、ちしやうとも、おほえすさふらへは、おもひなからも、ちからなし、いつれも、あくるはるのころは、かならずむかいを、まいらすべし、それまでまたせ給へとて、たばかりすまし、うしわかとの、なみだのふぜいして、出たまひ、(秋田本)

御伽文庫本では、天女はまず日本に帰ることを勧める。そして傍線部のように、兵法の使い方を義経に教えて彼を帰らせる。やがて

義経は兵法を用いて無事日本に帰ってくる。

一方、秋田本では義経は兵法を手に入れた後、傍線部のように朝日を騙した上、泣くふりまでして船に乗って逃げる。秋田本では天女の発言はなく、兵法は義経自身が読んで日本へ帰ってくる。

ここから朝日天女の描かれ方の違いが見えてくる。御伽文庫本といたった流布本系統諸本では天女は義経を援助し、守り導く女性として描かれており、秋田本では利用され騙される無力で哀れな女性として描かれている。言い換えると、この場面で主導権を持っているのは、流布本系統の諸本では朝日天女であり、秋田本では義経なのである。

男性より優位に立ち、男性を援助する女性について、徳田和夫氏は「非力な男性に女性の持つ生産力を分け与え、男性の所期の願望を満たさせるわけであり、それは神を讃嘆し続け、神の降臨をうながし、その靈威の発動をひたすら待つ巫女の役割に等しいといえよう」と言われている。神に近い存在、つまり神的な性格を持っているのである。特に朝日天女の朝日という名前について、柳田国男氏が「神に傳いて後に自らも神に祭らる、」²⁴女性に多く、「巫女に朝日と云ふ名がある」と言われている。加えて福田晃氏は「民間巫女たちには、「何日」を称するものが少なくなかった」と述べておられる。

流布本系統諸本における義経を守り導く天女は、神的性格が濃厚である。それに対して、秋田本の朝日は男性に騙される哀れな女性であり、神的性格が感じられない。このような違いが、江の鳥弁才天の記述の有無を決定付けているのではないだろうか。天女の神的性格が強い流布本系統諸本では、江の鳥弁才天といった神仏である必然性がある。

しかし秋田本に見られるような無力な朝日には、江の鳥弁才天は不要ではなかったか。また、秋田本の末尾には源氏奉祝が見られない²⁵。やはり江の鳥弁才天をこの作品に取り込む必然性が感じられず、江の鳥弁才天記述がないのも当然である。

おわりに

本稿では、御伽草子『御曹子鳥渡』に江の鳥弁才天が登場する意味について考えてきた。弁才天の水の神という性質は、島内氏の御論の通り、この物語が水を基調としていることから結びつく要因になったと考えられる。

しかしそれだけでは江の鳥弁才天である理由にはならない。江の鳥弁才天は中世末期には軍神としての信仰を集めていた。兵法取得を成就させる女神として、江の鳥弁才天がふさわしいというのがまず言える。また江の鳥という場所は、鎌倉將軍家を思い出させる場

所でもあった。御伽草子の中では、頼朝を中心とする鎌倉将軍家を讃える場として、鶴岡八幡宮に次ぐ地位が与えられていた。それは頼朝の勧請、将軍家参詣という記憶が綿々と残っていたためと言え。江の島弁才天は鎌倉政権成立を援助する軍神として、ふさわしい神だったのである。

「この天女の本地をくはしくたつぬるに」には、「本地」という言葉が使われている。室町時代を中心に、本地物と呼ばれる作品が多く作られている。しかし現存している『御曹子島渡』は、登場人物が物語の最後に神仏となって現れるという、本地物形式は取っていない。この場合の「本地」は、素性や本性といった意味で使っている。よってこの江の島弁才天の記述は、むしろ後から物語に付加された可能性が大きいと考えている。

義経と朝日天女の恋愛を中心とする兵法取得譚に、鎌倉政権成立のため江の島弁才天が助力したという要素が付与されたのではない。江の島弁才天は流布本系統諸本のような神的性格を持った女性に結び付いた。或は江の島弁才天が付与されたため、神的性格を持つ女性になったとも考えられる。背後には源氏との関わりを主張していた江の島側の働きかけがあったのかもしれない。江の島には中世末期、岩本坊、上之坊、下之坊という別当寺があったが、中でも総別当の地位にあった岩本坊は『江島縁起』を保管しており、宣伝

活動をしていたようである。

ともあれ、江の島弁才天は『御曹子島渡』に含まれる要素「源氏、兵法、援助する女性」と関わりのある神であった。だからこそ御伽草子と呼ばれる作品は多いが、『御曹子島渡』に付与されることになったのではないかと思うのである。

注

- ① 島内景二「御曹子島渡り」―女性の援助」（島内景二『御伽草子の精神史』ペリかん社 一九八八年五月）
- ② 河北洋子「御曹子島渡」が示すもの―異界と現実のはざまから―（『広島女学院大学国語国文学誌』二十九号 一九九九年十二月）
- ③ 是沢恭三「江島弁財天信仰史」東京史談会 一九五四年十二月、一九五五年四月
- ④ 藤沢市史編さん委員会編『藤沢市史 第四卷 通史編』藤沢市役所 一九七二年三月
- ⑤ 『新訂増補国史大系 第三十二卷 吾妻鏡前篇』吉川弘文館 一九六四年七月、『新訂増補国史大系 第三十三卷 吾妻鏡後篇』一九六五年二月
- ⑥ 注⑤に同じ
建仁元年六月一日
一日己卯。陰。寅剋。左金吾御参江島明神。（以下略）
建保四年三月十六日
十六日己巳。快霽。御台所詣江島給。（以下略）
安貞二年四月二十二日

廿二日乙丑。小雨。將軍家御參江島明神。(以下略)

⑦ 注⑤に同じ

承元二年六月十六日

十六日甲申。快晴。自去月至今。不降二滴雨。庶民失耕作術。仍被仰祈雨事於鶴岳供僧等之處。群參江島。祈請龍穴云々。

元仁元年六月六日

六日壬申。霽。炎旱涉旬。仍今日為祈雨。被行靈所七瀬御祓。

(中略) 江島龍穴信賢。此御祓。関東今度始也。(以下略)

⑧ 注⑤に同じ

寛喜元年十一月十七日

江島神有託宣。於崇敬之族者。可授福田之由云々。仍道俗成群云々。

⑨ 注③に同じ

⑩ 貫達人編『改訂新編相州古文書 第五卷』角川書店 一九七〇年七月

一九三八 鎌倉御所足利御教書

(包紙、七八番)
「御感状 問宮肥前」

今度自最前、於鎌倉、致警固之條、神妙也、弥可勵勤厚之状如件、

享徳四年三月十二日 (花押) (足利成氏)

問宮肥前守とのへ

問宮肥前守の子息は、江の島の別当寺である岩本坊の住僧であったとされる。

⑪ 注④に同じ

⑫ 注⑩に同じ

⑬ 塙保己一編『群書類従 第二十一輯』続群書類従完成会 一九三二年十二月

⑭ 注③に同じ

⑮ 竹内秀雄校注『神道大系 神社編十六 駿河・伊豆・甲斐・相模国』精興社 一九八〇年三月

⑯ 山本ひろ子「宇賀神王—その中世的様態—」叡山における弁才天信仰をめぐって』(『神語り研究』第三号 一九八九年十一月)

⑰ 『大正新脩大藏経』経集部三

⑱ 金井清光「福神狂言の形成」(『秋山虔』中世文学の研究』東京大学出版会 一九七二年五月)

⑲ 佐成謙太郎『謡曲大観 第一卷』明治書院 一九六三年十二月

⑳ 芳賀矢一、佐佐木信綱校注『校註謡曲叢書 第一卷』復刻版(初版一九一五年四月) 臨川書店 一九八七年十月

㉑ 田中充編『未刊謡曲集 続十八』古典文庫 一九九六年四月

㉒ 注⑰に同じ

㉓ 市古貞次編『御伽草子 全二十三冊』17浜出草紙 三弥井書店 一九七一年十月

㉔ 市古貞次編『御伽草子 全二十三冊』5唐糸さうし 三弥井書店 一九七一年十月

㉕ 田中貴子「竜蛇となった(悪女)『道成寺縁起絵巻』から『華嚴縁起絵巻』へ」(田中貴子『悪女』論 紀伊國屋書店 一九九二年六月)

㉖ 佐伯真一「源頼朝と軍記・説話・物語」(『説話と説話文学の会編』説話論集 第二集 説話と軍記物語』清文堂 一九九二年四月)

㉗ 松本隆信「室町時代物語類現存本簡明目録」(初出『斯道文庫論集』

一号 一九六二年三月、奈良絵本国際研究会『御伽草子の世界』三省堂 一九八二年八月所収)を基に、補足し次に提示した。補足したものは「*」を付けている。(一)の(イ)(ロ)(ハ)(ニ)は流布本系

統語本、(二)(三)は異本である。

(一)

(イ) 大東急記念文庫蔵絵巻 大二軸

* 九曜文庫蔵絵巻 上欠(中野幸一編『奈良絵本絵巻集』十一に影印)

(ロ) 赤木文庫旧蔵絵巻 大二軸

* 支子文庫蔵絵巻(国文学研究資料館マイクロフィルム)

(ハ) 山田平十郎旧蔵奈良絵本 特大三冊

(ニ) 刊丹緑絵入横本二巻 上欠

御伽文庫本

赤木文庫旧蔵「文鳳堂雜纂」所収写本

(一) 秋田県立図書館蔵絵巻 大一軸

(三) 赤木文庫旧蔵絵巻 大一軸

②8 徳田和夫「背後の神女」(『国語通信』二五七号 一九八三年八月)

②9 柳田国男「神を助けた話」(初出柳田国男『神を助けた話』玄文社

一九二〇年二月、『定本柳田国男集 第十二巻』筑摩書房 一九六九年

五月)

③0 福田晃「児持山縁起の源流(二)―日光感精譚と児持山縁起―」注

(17)(初出原題「神道集『上野国児持山之事』の源流」『論究日本文学』

四五号 一九八二年五月、福田晃『神道集説話の成立』三弥井書店

一九八四年五月所収)

③1 秋田本の末尾は「御さうしの、御くはほうは、月にかさなり、日にま

さり、申はかりは、なかりけり」と結ばれている。義経の果報を褒め讃

えて終わっている。

使用テキスト

『御曹子鳥渡』の本文は、御伽文庫本は市古貞次編『御伽草子 全二十

御伽草子『御曹子鳥渡』と江の鳥弁才天

三冊】4 御曹子鳥渡(三弥井書店 一九七一年十月)、秋田本は横山重校
訂『室町時代物語集 第五』(井上書房 一九六二年六月)に拠っている。

(付記) 本稿は伝承文学研究会関西例会(二〇〇三年五月十八日)及び、
同志社大学国文学会(二〇〇四年六月二十日)において、口頭発表した
ものを基にまとめたものです。席上、多くの貴重なご意見を賜りました。
深く御礼申し上げます。